

吉川 まあ、変な話なんだけど。別に利益を上げちゃいけないですよ。彼らは勉強したいからというので、インターンをやるNPOをつくっているんです。それで、色々な大学がそこに集まって、普段は勉強会をやっていて、役所だとかを、受け入れてくれるならば、その中から行きたい人を出す。ただ斡旋ですから、別に何も報酬もないし、また、行く学生も報酬があろうがなかろうが、御自分が勉強したいというので行っているんですね。ただ、そういうグループは、情報交換をしたり、あるいは派遣のいろんなチャンネルを得るために相互のメリットがあるので、そういうNPOをつくっているのがあるんです。今の学生さんは大したものですよ。今そのグループは東京都に法人のを申請しています、学生インターンの。メンバーは早稲田の政経の学生と慶応の法学部の学生が中心で、僕の所にも来るんですよ、市政調査会で少しインターンをやらせてくれというのが。それは勉強したいからと言うんですけどね。そういうのだったら使えますよ。

谷 資料を調べてコピーをとったりというのは、時間的に結構かかりますよね。私、東京に来ている時間そのものが少ないから、とても自分でやられていられないな。少しはそういうのも相談してやりましょう。そうすると、あと1時間ぐらいで、安全に対する考え方が今少し変わりつつある、あるいは大きく歴史的に転換しているのかも知れませんが、そのへんのところを少し議論して頂きたいと思います。

東郷 さっき谷さんが、この間のあれを契機にして、大きく舵を切ったら…、みたいなお話がありました。そこを入れるのは当然ですけども、要するにこれまでも、今後も、問題が色々ありますよね。ですから、そのへんのウエイトをまずどういうふうにか考えるのかというようなことがあるのだと思うのですが。

恒松 アンケートをするにしても、中身が問題ですからね。しかもこれは都市問題ですよ。安全な都市。また、「都市」という定義もなかなか難しいかも知れませんが。

谷 特に都市がそういうものに弱いだらうということでは、人間社会全体を一応は対象として、その中の特に都市ということ。

例えば、石川県なんていうのは殆ど田舎ですね。そうすると、炭疽菌なんて言ったら、全然みんなピンと来てないですね。

恒松 僕なんか全然ピンと来てません（笑い）。

谷 海外からメールが来る人なんて殆どいないですから。大学は結構海外からメールが来ますから、ちょっとビビっている人も中にはいましたけど。それは東京と随分温度差が違うんじゃないですか。逆に狂牛病辺りは、牛を飼っている農家とかは結構大変ですよ。

恒松 らしいですね。この頃の農家って、昔みたいに2頭とか3頭とかという牛を飼っているじゃなくて、今、我が島根県辺りでも3,000頭とか4,000頭とかというのをやっているわけです。そういうのは餌は肉骨粉みたいなものをやっているわけですから、そういう所は大打撃らしいですね、牛が売れなくなって。

谷 生きものですから、飼っておけばお金はどんどんかかるわけですよ。収入がなくなるわけですから。特に石川県は、ここ1年ぐらいで3回牛乳の事故をやっているんですね。1社は潰れちゃったんですよ。

恒松 牛乳の事故というのは？

谷 牛乳の中に何かが混入して…。

吉川 雪印みたいな、ああいうのですか。

谷 ええ、雪印の後、高木ジャージーというところと、カホクガタ何とか、小さなところが3社やっているんです。多分、全国ニュースにもちらっとはなっていると思うんですけども、1社は潰れてしまいました。だから、もともと酪農業が既に結構打撃を受けているんです。その上に肉ですから、牛乳と肉をやられたら、もう駄目です。

では私が口火を切りますね。私、ワールドトレードセンターで事故が起こった時に、あ、やっぱり起こったなと思ったんです。というのは、その前に、どこでしたか、全日空でしたか、ちょっとキチガイが刃物で脅して、レインボーブリッジの下をくぐらせようとして、実際はくぐらなかつたんですけど、それで機長が殺されたという事件がありましたね。あの時に、スチュワーデスか誰かが刃物で脅されて、それが痛められるといけなから機長がドアを開けたということだったんですね。それで、機長は優しく説得して、座らせて、実際に操縦させたりしたらしいんですけども、私あれを聞いた時に、一瞬、あ、開けるべきじゃないのと思ったんですね。というのは、それが墜落したら全員死んでしまうわけです。それから、

もっとひどいところへ突っ込んだら、その何倍という人が死ぬわけですね。その場にいととなかなかそうできないのかも知れないけども、目の前の人の命を救うという行動が、後でさらに大きな人を殺すという可能性があって、これから航空機は凶器になるなと一瞬思ったんです、その時に。だから、ワールドトレードセンターのは、正にそれが起こってしまったなという感じがしたんですけども、そういう目で考えると、本当に現代の社会というのは、悪い方向に利用しようとするれば、何人でも殺せるような凶器がごろごろしているわけですね。だから本当に都市の安全って難しいなと思います。

それから、日本ではオウムの事件がありましたよね。あれがあったにもかかわらず、それを総括して、都市がどうやったら安全になるかと余り考えてこなかったんじゃないかという気がしたんですね。今度はいい機会なので、そういうことを考えて、それでどこまで都市が防衛できるかという問題もありますけども、少なくともハードルをどんどん高くしていかないと、模倣犯だって起こりかねないですよ。

恒松 しかしそういうのは、我々はよく知らないけども、政府の方としてはやっているんじゃないですかね。

谷 やっていると思っていてやっていなかったのが狂牛病なんでしょう。我々はヨーロッパであれだけ騒ぎになったのだから、当然日本はやっているだろうと思っていたら、肉骨粉を実はイギリスから輸入していたと。

奥田 でも、谷さんの御専門からすれば、やっとなそういうハードコアの都市づくりみたいなことから、ソフトの都市づくりみたいなものにだんだんソフトランディングしてきた時期を迎えた時に、今そういう事件にどう対応するかと言うと、やっぱりもう少し力強いハードな都市づくりみたいな感じが、これから再び強調され出してしまうのではないか。

僕はニューヨークのその痛ましい問題は、勿論それはやぶさかでないのですが、それを横に置くと、ニューヨークの貿易センターみたいなああい構造の都市というのは、20世紀の典型的な都市像であって、あれが壊れた後の都市ということが21世紀の都市というふうに私ずっと思っていたものですから。

新宿だって私が調査している外国人の大久保だとか百人町から見ると、あの東京都庁の建物というのが、逆から言うと、どんな異質な建物であるかというのは目に見えているわけです。20世紀の力強い都市というのは、工業化都市の象徴だと僕は思うので、今、谷さんの専門分野だって、脱工業化というか、ポスト・インダストリアルというのは、そういう都市づくりということ、そう思うんですけど、そういう中でこういうような問題をどう対応するかと言うと、僕はああいテロというのが、20世紀の最後の終末を告げるような、非常にアグリーな事件で、一見非常にグローバルな、世界を巻き込むけれど、やっぱり20世紀型の事件だというふうに思うんです。

これから起きるのは、本当にさっきの炭疽病じゃないけれど、姿形が見えないような、もっと人の心とか、人と人の関係性の中で、何がテロで何が非テロなのかかわからないような問題がこれから出てくる。そういう意味の、正にポスト・インダストリアル段階における犯罪とか都市の不安とか非安全の問題を少し議論しておかないと、かつて戦争中にあったような防空都市の研究が日本で非常に盛んになったのと、今の新しいハ(?)みたいなのではちょっと違うんじゃないかという感じがします。

谷 私は逆に都市をより堅固にして、ハードを固めてという方に発想してはいないんです。一番問題なのは、人間と人間の関係がどんどん希薄になっていることだと思っていますよね。実はそのテロというのも、究極はテロですけども、ずっと薄めていった先には、例えば無言電話とか、嫌がらせとか、その延長ですよ。だから、匿名性を利用して自分の顔を見せずに相手を傷つけるということは、かなり日常的に起こっているわけで、そこから攻めていかないと、テロにまで行き着かないかなという感じがしていて、ですから、人間と人間の関係がどんどん希薄になっているところが、それは工業化社会が生んだのかも知れませんが、それが何とか都市でもっと…。難しいところは、監視社会になるのも困りますし、一番怖いのは、例えばアメリカが言っているみたいに、テロを撲滅して、アメリカだけが世界の全てをコントロールするなんて、これも非常に怖いですね。

奥田 怖いと言うか、アグリーですよ。

谷 ええ。ですから、非常に難しい問題を一杯はらんでいると思いますね。だからといって、テロが頻発して起こって、安心して旅行もできないというのも困りますね。私も実際11月に行く学会をキャンセルしたばかりなんですけど。

恒松 アメリカ？

谷 ええ。

東郷 うち、10、11月末からみんな出かけるんですが、ニューヨーク…研究所とジョイントプロジェクトをやっていますから、この間、9月12日に出かけるはずが、11日にあんなことがあって、朴川君も足止めです。もう一度今練り直しているんです、来月末に。

先程、奥田先生から、20世紀型と言われて、僕も色々な発言をすると、「お前は20世紀型だ」みたいに言われるかも知れませんが、私ももともと都市というのは、今言われたように、匿名性とか色々なメリットがあって、そのメリットを求めてきたという部分が、勿論外の理由もありますが、かなりあるわけですよ。だから、そういうものから、今度は逆にそのメリットがこういう形でデメリットの形になってきたから、それは一つそれでフォローしなければいけない。

それから、これはある意味でハードの流れでやってきたという経緯からして、日本では防衛とか戦争とかそういう発想で議論をしていなかったんです。それで、昭和57年のバブルの直前ですけど、あの頃によく東京都の長期計画をつくった時に、何年かかけて色々な要因の議論をしたことがあるんです。それは外部の先生も入れた中でね。その時にちらっとそういう話が出て、私は昔ロンドンでしばらく勉強した時には、これはロンドンだけではないのですが、ヨーロッパの場合は、アメリカもそうかも知れませんが、特にヨーロッパは、都市をつくるにしてもその議論が一つ入ってくるんですよ。日本はその議論が入ってこないで、それにリプレイするものとして災害ということだけで、全部置き換えて、そういう意味では平和ボケなんですけれども、ですから、攻撃とかそういうものについての議論というのは、これは東京だけではないかも知れませんが、日本はないんですよ。

それは何の議論の時にしたかと言うと、今また別の動きが出ているのですが、東京の一点集中型の話があって、それである時は随分議論したことがあります。例えば、東京駅に全部色々なものを乗り入れて、それである所に超高層を建てれば、これで万々歳だとある国鉄総裁が言われたことがあるんですよ。何て馬鹿なことを言っているんだろうと思ったわけですが、実際、あそこの超高層の議論は潰れて、歴史的建造物であるあれを何とかそのままたしていきましようという話にそこはなりましたけど、色々なものを入れ込むという話は、相変わらずやっているんですよ。

これはヨーロッパの都市は御案内のとおり、ロンドンだってパリだってどこを見ても、ローマはムッソリーニのお粗末さかどうか知らないけれども、あそこにテルミニという中央駅をつくりましたけど、あとはロンドンだって御案内のとおり、みんな、やれパディントンだ、セントパンクラスだと、要するに五つか六つにやって、それから、パリだって、逆に北駅だ、南駅だと、こういうふうになっているわけでしょう。それを何でもかんでも入れて、私はこんなに潰ししやすい都市が、ちょっと極論かも知れませんが、ないというぐらいのあれを持っていたんです。便宜とかそっちのスタンスばかりで、一朝何かあった時に、それがどう麻痺するのだという話が全くないと言うとオーバーかも知れませんが、そういうところがあって、私は20世紀型云々だけに、先程たまたまお話があったからあれですが、本当は20世紀型だけにとどまってははいないのかなと。

それで、たまたまこの間の週末、東京の都市再生の論文をどうしても書けというので、書かされて書き上げたところで、また政府の悪口を書くような格好にはなってしまったのですが、そういうのもみんな、真ん中へ色々なものを集めて、東京中心で世界に冠たるものでないと国際競争に勝てないという、今の都市再生本部のあれがあって、一理はあるんですよ、一理はあるけれども、本当にそれがどうなのかというところが、今のようなファクターも含めてあるものですから、20世紀型だけとも言えないのかなと思ったりしているのですが。

奥田 貿易センターの後、あれの再生像というのか、再開発像というのは、どういうふうにお考えになりますか。アメリカはどういうふうにやるとお思いになりますか。

東郷 今議論されているのは、ともかく、象徴だから、もう一回あれをやるという考え方と、それと、今まで二つあった、これを半分の高さ、50階位を4棟建てるという議論を今やっていますよね。そこから先また議論が進んでいるかも知れませんが。

奥田 あれよりもっと高く、力強く、壊れない都市というふうにはならないと思っていました。だから、ほどほどの、正に今おっしゃった再生というイメージであって、再開発というのとちょっと違うと思うのだけど、ヨーロッパだったら、あれをそのままにしておくと思うんです。今、色々な問題を抱えているからタブーですけど。それで、あれを観光の名所にしていく。テロというものを二度と繰り返さないという

人々の祈りと証のあれとしてそのまま置いておきますね。

東郷 広島原爆を…。

奥田 広島をなぜああいうふうにしたかというのは、ヨーロッパの感覚ですよ。あれだったらそのままにしておきますよ、広島を。そうしたら世界的なそういうようなメッカになったという。

恒松 それはドームばかりではなくて、広島市全体をね。

奥田 それは勿論限度があるけれど、少なくとも市街地的な広さであれをそのままにして、世界的なそういう意味の、二度とそういうことを繰り返してはならないという、これ以上の日本が世界に発信できるようなことはない。それはヨーロッパの都市計画だったらそうだと思うのだけれど、やっぱり日本とかアメリカは違うかも知れません。それでも、貿易センターをさらに高い力の意志を示すようなものにはならないというふうに思わなくてはいけない、というだけのことなんですけど。

谷 東郷さんのおっしゃられたことは、我々の世代は非常に感じているんですね。我々は戦争を知らない世代ですから、なぜそんなに戦争に臆病になって、勿論戦争をしたいというわけではなくて、話すこと、議論すること、戦争だけではなくて、危険とか何とか、なるべく見ないようにするんですよ。

東郷 僕は、都市づくりの議論でも、みんな防災に切り替えてストーリーをやっているんですよ。だから、戦争とかそういう脅威というようなものをあれすると、僕はあの時の雰囲気を感じていますが、何かみなきょとんとするんですね。ある意味の平和ボケかなと思うんですけども。

谷 それで、防災も基本的には壊れない建物をつくらうとか、そういう発想に行くんですね。壊れた時どうするかという議論になかなかなくて、だから、こういう事件とか事故とかいうのも、起こらないようにしようということばかり一所懸命して、起こったらどうしようということを考えないんですね。狂牛病なんかでも、全頭を検査するから安全です。「ヒューマンエラーはありませんか」と記者が聞いたら、大臣が「ないことを前提に考えています」と言うけど、それはないだろうと思って、あったらこうしますと言わないと、誰も安心できないですよ。ヒューマンエラーがないなんて、あり得ないですもの。そういう発想なんですよ。

恒松 それはそうなんですけど、しかし行政担当者としては、やっぱりそう言わざるを得ないんじゃないですかね。

谷 でも、それは日本特有じゃないですかね。

東郷 さっき、谷さんが見える前に話していたんですが、アメリカの爆撃だって、ピンポイントだって言うから、エラーはない、民間は殺さないと言っているわけですね。それで、隣がまずやられた時に、あれは何か数字を2と3と入れ違えたかなんかで隣へ当たったと、ああいう議論があったでしょう。それで、今でもテレビに出ているけれども、アメリカは、あれは向こうが勝手に言っているの、こっちはそうじゃないみたいなことを言っているんだけれども、そういうことはあり得ないということを前提にすること自体、問題だということが言いたいんですけど。

谷 軍事の建前はあれでしょうがないと思うんですけど、でもアメリカも結局、最終的にはどこかの時点で認めますよね。

何となく、私、日本の役所の体質というのは、よく日本が一番よくできた共産主義だと言いますが、ソビエトの共産党に似ているんじゃないかと思えます。無謬性と言いますが、誤りは起こり得ないという前提で動いている。

恒松 それは今でも官庁の伝統的な精神でしょう、無謬性というのは、自分達がやることに誤りはないんだということで、前提にしてやっているわけですよ。

谷 誤りが起こった時には、どう対応していいかわからなくなってしまうんですよ。

恒松 対応の仕方もそうなんですけど、やっぱりいけないことだと思うんですよ。人間がやることだから、誤りがあるという前提でやらなければいけないと思いますけどね。行政改革、行政改革と言うけど、そんな意識がまるで変わらないで行政改革をやったって意味がないと思うんですけどね。幾つかの省庁を集めてみたって、どうってことないですよ。意識が変わらないから。

谷 私はわりといい息子で、親父と殆ど言い争いをしたことがないんですけど、一つだけ言い争いをしたことがあって、役人の悪口を私言ったんですが、そうしたらうちの親父は役人出身だから、「役所に入った途端に国益より省益、省益より局益」と言い出したから、それが全部おかしいと言ったら、大喧嘩になったことがありますけどね（笑）。だから、我々の親父の世代からそうなんですよ。だけど、あの世